

あとがきにかえて

精神の熱

「ジャコモッティと矢内原伊作」展によせて

今回の「ジャコモッティと矢内原伊作」展は、今世紀最高の彫刻家・画家であるアルベルト・ジャコモッティAlberto Giacometti(1901-66)の作品展である。と同時に彼の数少ないモデルの一人であり、よき理解者であったわが国の哲学者・詩人の矢内原伊作(1918-89)を通して、ジャコモッティのしごとを見ようとする展覧会である。

Ⅰ ジャコモッティ探索の旅

この展覧会の準備のため、私は娘の真知を通訳に連れて6月15日から30日まで、ジャコモッティ探索の旅に出た。ついでにクレーについても調べておきたいという気持ちもあり、ベルン、チューリッヒ、バーゼル、パリそしてニューヨークをひと廻りしてきた。クレーについても興味ある新発見があったが、これは省略し、ここではジャコモッティについてその概要を記しておきたい。

ジャコモッティ財団(チューリッヒ)

6月22日、チューリッヒ美術館内にあるジャコモッティ財団を訪問、責任者のクレム氏に会い、2時間ばかりジャコモッティの作品、特に矢内原伊作を対象とした彫刻、油彩について話をきいた。クレム氏は所蔵の資料のなかから矢内原に関する作品のコピーをすべて提供してくださったのはありがたいことであった。この資料が後出の「ジャコモッティによる矢内原伊作像」リストの原型となった。

財団ではジャコモッティの作品を購入されているのか、という質問には、最近は購入していないとのこと。そして、ご寄贈いただけるのであれば喜んで、とおだやかな笑顔で答えられたのが何とも印象的であった。また、作品のサーティフィケーションは発行していません、とのことであった。丁寧な応対に感謝し辞去した。

そのあと美術館でジャコモッティの作品を見たが、ゆったりとした空間に初期から晩年までの彫刻、油彩、デッサン等が80点ばかり展示されている。これは壮観であった。おそらく、世界中でもっとも充実したジャコ

メッティのコレクションであろう。ジャコモメッティの父ジョヴァンニ・ジャコモメッティがスイス印象派の画家で、この美術館を始めスイス各美術館に収蔵されている重要な作家であること、つまり父子ともどもスイスの誇るべき芸術家である、という事実の重みが、財団にも美術館にもはっきりとみえるのである。

バイエラー画廊(バーゼル)

6月21日、バイエラー画廊を訪問。画廊主のエルンスト・バイエラーさんに会い、当画廊のジャコモメッティと矢内原展の話をし、ぜひともご所蔵の矢内原像の油彩をお貸し願いたい旨懇請した。バイエラーさんはお貸ししましょう、ただし、お売りすることはできません、との条件付きでご了承いただいた。その作品が当画廊で展示される。わが国では初めての展示である。これで展覧会の内容はすこぶる充実した見応えのあるものとなる。感謝である。

バーゼルのアート・フェア

丁度、開催中のアート・フェア(6/15-20)を6月19、20日の両日観る機会に恵まれた。偶然、NICAFの白石正美さんに出会った。わが国からは鎌倉画廊、ギャラリーHAMが出店しておられる。大変盛況であった。

われわれの主目的はジャコモメッティ、クレーの市場調査である。バイエラー画廊ほか、世界の有力画廊がジャコモメッティの彫刻、油彩、デッサンを出品している、その作品と価格を調査した。画廊により異なるが、総じて価格は堅調である。と同時にデッサンの価格がわが国と比較して高い。デッサンに対する両者の考え方の相違によるものであろう。

イヴ・ボヌフォア教授(パリ)

6月23日、コレージュ・ド・フランスにボヌフォア教授を訪ねる。ボヌフォアさんは'91年にジャコモメッティの大冊を出版され、'93年には清水茂さんの訳で日本でも出版されている。清水茂さんからのメッセージを伝え、矢内原伊作のジャコモメッティ写真集(用美社刊1986年)をお渡しし、ジャコモメッティの矢内原伊作あての手紙数通のコピーをおみせした。

手紙を手にとったボヌフォアさんは驚きの声をあげられた。ジャコモメッティは友人にまめに手紙を書く男ではなかった。その男がかくも多くの手紙を書き送っていたこと自体、驚くべきことである。(実際には30通余の手紙が送られている。)ぜひともその手紙を読みたい。それを読めば、私

の書いた矢内原についての文章を書き直すことになるような発見があるに違いない、と興奮してはなされたのが印象的であった。

ジャコメッティと矢内原は特別の強い愛情と信頼で結びついていた、とボヌフォアさんは言い、ジャコメッティが矢内原を見る眼はモデルという面からともうひとつは人間的な側面から、二重に見ていたと思われる。私は矢内原について知るところが少ないので、あなたのジャコメッティ/矢内原展に大変興味を持っていると話された。また、矢内原撮影のジャコメッティ写真集は、他の写真集とは視点の異なる面白さがあると興味を示された。

ボヌフォアさんは肉付きのいい瀧口修造を感じさせる風貌で、そう言えばお二人とも詩人だったなあと初対面ながら親しみを感じ、一時間余の会談を了えたのである。

アルベルト・ジャコメッティ協会(パリ)

6月24日、協会の責任者、リサ・パーマーさんに会う。一昨年会っているので二度目である。昨年9月亡くなったジャコメッティ夫人アネットさんの秘書を長らく勤めていた方である。矢内原をモチーフにしたジャコメッティの作品について調査している旨話し協力を求めた。協会は近く財団に組織変更されること、その財団基金調達のためとアネットの遺産に関する相続税支払いのために7月11日、タジャン・オークションでアネット所有のジャコメッティ作品が売立に出されるとのことであった。彫刻(ブロンズ)はともかく、一点切りの油彩がオークションで手元から離れて行くのはつらいことです、私の力の及ばないところで決定されたことですから致し方ありません、と話すパーマーさんの表情に一瞬、淋しさがよぎったのを私は見た。ジャコメッティの作品カタログレゾネを作成準備中なので、協力してほしいとの要請があった。

タジャンのジャコメッティのオークション(パリ)

6月24日、上記のオークション(7/11)出品作品をみることができた。総点数18点のうちわけは油彩4点、ブロンズ14点である。ブロンズはジャコメッティの死後鑄造されたものである。

私のもっとも興味を持った作品は矢内原伊作像の油彩(1959年)30号であった。今でも私の脳裏に焼き付いているこの作品の運命はどのようになるであろうか。次に私がこの作品と出会うのは何時、何処であろうか。さまざまな思いを抱いて会場を去った。

シュス: 鑄造工房(パリ)

引き続き誘われて、ジャコメッティのブロンズを鑄造している工房を訪ねる機会を得た。代表者のピネレス氏の案内で工房をみた後、ジャコメッティのブロンズについて、お話をきいた。この工房では1961年以来アネットの亡くなるまで、ジャコメッティのブロンズを鑄造し、その点数は180点余りとのことである。作品ごとにカードで整理されている。矢内原像のブロンズ作品が2点あることも確認できた。鑄造された点数は最初の型に対し1960年に5点(1/6-5/6)、61年に1点(6/6)、二番目の型に対し62年に3点(1/6-3/6)というシュスの記録があり計9点の矢内原ブロンズ像が世界に存在していることになる。

アクアベラ画廊(NY)

6月28日、アクアベラ画廊でジャコメッティの矢内原ブロンズを見る機会を得た。今回この展覧会カタログに掲載している作品(ピエール・マチス旧蔵、エディシヨ1/6、1960年)である。この秋アクアベラ画廊では彫刻油彩等60点を集めてジャコメッティ展を開催の計画ときいている。

かくして、ジャコメッティ探索の旅は終わった。この旅を振り返って感ずることを記しておきたい。

第一に、ジャコメッティの研究は始まったばかりである、ということである。何故ならひとつの問題について話を聞くと、その人によって、その立場によって、話されることがすべて微妙に異なる、ということである。これは当然といえば当然であろうが、事実は事実として明らかにしていくことが望まれる。

第二に、一人の作家についてその作家の出身地と実際に仕事をした土地、この二つの場所における美術関係者の対応が、私には興味があった。ジャコメッティに関していえば、チューリッヒ(スイス)とパリ(フランス)の対応である。

わが国でも地縁的な関係から作家を取り上げ、美術館の目玉とする傾向がみえるが、それはよく分かる。どちらかというと幕の内弁当的な、どこもみな同じでチマチマしているのよりも、個性的であることの方がはるかに評価できる。しかし単に地縁というだけで、内容がまずしいのでは困ったものである。

旅に出ると、この国のことがみえてきて気になるのである。蛇足は承知のうえでひとこと申し述べた。

第三にこの旅の成果として、別表「アルベルト・ジャコメッティによる矢内原伊作像」が出来上がった。油彩14点、彫刻2点、計16点が収録されているが、脚注に示したようにこれで完全とはいえない。ただ、ポヌフォア教授のジャコメッティの著書に示されている矢内原像は油彩12点、彫刻1点とされる記録よりは幾分の前進が見られた、といえよう。関係者の諸氏のご協力に感謝申し上げる。

このリストをみて、彫刻が案外少なく、油彩が思いのほか多いのに驚いた。私にはジャコメッティは彫刻家である、とする意識が強いためであろう。矢内原像の彫刻(ブロンズ)は2点である。カロリーヌの場合も油彩が圧倒的に多いのである。勿論、デッサンはさらに多い。このことは矢内原コレクションのデッサンが示すところである。デッサンはジャコメッティの生き様を示している。つまり生の証しなのである。油彩は油絵具で描かれたデッサンである。その意味で彫刻よりも点数が多いのは当然である。また彫刻にはその制作に長い時間を要するという理由もあろう。

矢内原伊作は宇佐見英治との対談の中で次のように話している。「ジャコメッティの彫刻と油彩についてどちらが重要か、ということは簡単に言えない。両方とも重要であって、お互いに補い合い、密接な関係にある」と。(「対談:ジャコメッティについて」用美社刊、1983)さらに矢内原伊作は次のJ-P. サルトルの言葉を挙げ、大変巧みな分析だと評している。「ジャコメッティは彫刻するときには絵描きのように仕事をする。そして絵を描くときには彫刻家のように仕事をする」と。

つまり、見えるものを見るように描く、または作る、というジャコメッティの絶対の探究は、平面でも立体でもなされていたのだ。コンセプトはひとつで、表現は2次元の平面と3次元の立体に分かれていたに過ぎない。従って、ジャコメッティの彫刻を見る場合、その作品のまわりをぐるりと廻ってみて判断するという常識は通用しない。ジャコメッティの彫刻は正面から見るとものなのだ。

それにしても、と私は思う。ジャコメッティの仕事は攻撃的だ。休むひまなく真正面から攻撃している。

II ジャコメッティと私

私のジャコメッティに対する意識は矢内原伊作編「ジャコメッティ」(みすず書房刊、1958)の本を手にしたことから始まっている。この本には矢内原伊作、J-P. サルトル、J. ジュネのジャコメッティ論が収録されていた。と同

時にその本に収録されているジャコメッティの彫刻、絵画の写真に眼をみはった。これはすごい、尋常ではない、私は直感した。

ついで矢内原伊作著「ジャコメッティとともに」(筑摩書房刊、1969)を手にしてそれを読み、私のジャコメッティは決定的なものとなった。私は夢中になって読んだ。この本は私をとらえた。上記2冊の本は、購入以来、大事に書架に納まっていたが、この展覧会のために取り出し、改めて眺めている。

矢内原伊作の著書はカタログの年譜、書誌をご覧になればお分かりのように多い。しかし決定的な著書を一冊挙げるとすれば、それは「ジャコメッティとともに」である。これは衆目の一致するところであろう。この本には熱がある。ジャコメッティを知ることによって矢内原伊作は彼の生の意味を知ったということが分かる。それがこの熱となって、われわれの心を動かすのである。

私の親しい友人Sさんは「ジャコメッティとともに」を読んで感動し、パリに行き、まず最初にジャコメッティのアトリエを訪ね、そして画商になることを決意した。20歳の時である。私は最近その話を彼から聴いて一瞬言葉を失った。現在ニューヨークでアートディーラーとして活躍しているSさんの出発点が、この本であった。この事実はこの本がいかにか若い美術に関心のある人間の心をとらえたかを如実に示しているのだ。

ところで、実は私は矢内原さんに1952年、京都の北白川であっている。勿論、知っているのは私のみで、矢内原さんをご存じない。

当時私は経済学部3年生で、京都大学農学部グラウンドの裏の西片瀬町に下宿していた。経済学よりも文学・美術の世界に心を引かれていた私は関係の雑誌等で矢内原先生の名前を知っていたし、写真でその風貌も知っていたのである。年譜によるとその当時、私の下宿にほど近い樋ノ口町にお住まいで、大阪大学文学部助教授の教職にあった。

東大路の方から北白川の山手の方に向かって、遠くから歩いてくる一人の人物が見える。だんだん近づいて来るにつれてその人物が矢内原先生であることを私は直感した。やはり一寸普通の人ではない雰囲気や漂わせている人物なのだ。私はとても声をかけるだけの力はなかった。当時の私には、内容がないのだから当然のことである。静かに見送るのみであった。しかし、この寸時の光景は今なお私の脳裡に焼き付いている。1952年の私の精神風景を示すものとして、大事に納まっている。42年前のことである。

矢内原先生と実際にお会いしたのは1983年11月、私の画廊で永井

康雄彫刻展を開催したときである。オープニングパーティーに永井さんの親しい方々が集まれたが、その中のお一人で、永井さんとはフランス留学の際の交友関係ときいた。

その時であったか、その後再訪されたときであったか定かではないが、私の部屋に掛かっている作品を見て、「宝の山ですな」と言われたのははっきり記憶している。その時何が展示して会ったか、憶えていないが、恐らく、エルンスト、ミロ、タンギーあたりではなかったろうか？何を話したか、私は憶えていない。

むしろ、私は最近、矢内原伊作について、宇佐見英治さんから、その人間像を知った。ただここでは私と矢内原さん自身とのかすかな触れ合いがあったことを私の心象風景ともども記しておきたかったのである。

さて、私が最初にジャコメッティの作品を購入したのは何時頃、何処でか、と問われると、これははっきりしている。私がまだ銀行に勤めていて、ささやかなコレクターだった頃、確か1969年、渋谷の西武美術館美術部でAさんから「男の顔」(1964年、リトグラフ、ed.75)の作品を40万円で購入したのである。この作品はジャコメッティの版画のなかでも五指のなかに入る優品で、サラリーマンの分際ではいささか分不相応とも思ったが、エイ！とばかり思い切って買ったのを今も鮮明に憶えている。では、ジャコメッティについて書いた最初の文章は、と問われれば、1970年5月、銀行の行内誌に「ジャコメッティ」と題し、一文を草したのが最初である。その材料は勿論、矢内原伊作編「ジャコメッティ」同著「ジャコメッティとともに」である。矢内原、サルトル、ジュネを下敷きに作り上げたものであるが、自分で身銭を切ってジャコメッティの作品を買ったという妙な自信が私の意識下で働いていたように思う。今取り出して読んでみるともっともらしいことが書いて会って恥ずかしいが、ジャコメッティが我々に与える熱気は伝えていると思う。

因みにこの文章を書いた動機は、当時、行内誌の編集委員であったが、原稿が思うように集まらず、その埋め草にやむなく筆を執らざるを得なくなったという事情による。

美術エッセーを隔月ごとに10回続けたが、第1回目はピカソ、2回目がジャコメッティで、その後クレー、エルンスト、ムーア、ミロ、ポロックと続いている。このシリーズは「ピカソ以後」として一冊にまとめられ、拙著「知命記」、「現代美術とともに」に収録されている。ものが生まれるのはそれぞれの場合があるが、私の場合いつもないものを絞り出すようなスクイズ方式による。

III ジャコメッティ、矢内原、宇佐見

ジャコメッティと矢内原

矢内原がジャコメッティに最初に出会った経緯はいかなるものであったか？ ボヌフォア教授の「ジャコメッティ」によると、矢内原はJ-P.サルトルの紹介で会ったと記されている。しかしこれは事実ではない。

1955年にパリ留学中の矢内原に、宇佐見から一冊の雑誌と手紙が送られてきた。その雑誌は美術手帖1955年4月号で、宇佐見のジャコメッティ論「ジャコメッティ一人と作品」が掲載されているのだ。この論文こそ我が国で最初のジャコメッティ論なのである。そして手紙にはこのジャコメッティ論をジャコメッティに届けてほしいと書かれてあった。

勿論、矢内原はジャコメッティについて知っていたが、単身訪問するほどの状況ではなかった。しかしこの雑誌と手紙が契機で、ジャコメッティのアトリエの扉をたたくことになるのである。

この辺のことは矢内原・宇佐見の対談、村越美津子(ギャラリー412)司会「ジャコメッティについて」(1983年、用美社刊)に詳しい。この対談集はジャコメッティを敬愛する二人のジャコメッティ観の差異も見えてきて貴重なジャコメッティ文献である。ここで明らかなように、矢内原はサルトルの紹介でジャコメッティに会ったのではない。宇佐見の論文と手紙が、契機となって会ったのだ。

ではサルトルはジャコメッティと矢内原の出会いに全く関係がないのか、といえばそれはあるのだ。

戦後、サルトルは実存主義哲学者として一世を風靡していた。当時の知識人にとってサルトルは無視できない存在であった。そのサルトルが1948年、ニューヨークのピエール・マチス画廊のジャコメッティ展のカタログに「絶対の探求——ジャコメッティの彫刻——」と題しテキストを書いたのである。このことによって、ジャコメッティの存在は全世界的なものとなった。(このカタログは小尾俊人さんのご好意で、会場に展示している。)

この「絶対の探究」は4年遅れて、1952年3月号の「美術批評」に瀧口修造の翻訳で掲載されたのである。(この訳文はさらに推敲されて、「サルトル全集シチュアシオンⅢ」人文書院刊1953年に収録されている。)このサルトルのジャコメッティ論はわが国の文学・美術関係者に大きな影響を及ぼした。ジャコメッティの存在がわが国でクローズアップされたのである。矢内原も宇佐見もこの「絶対の探究」から影響を受けている。

宇佐見が前記ジャコメッティ論を美術手帖に寄稿するのも、この「絶対

の探究」がひとつの原因といえよう。さらに言うならば、ジャコモッティに対する関心の度合は、当時においては矢内原よりも宇佐見の方が強かったと言える。

ともあれ、矢内原も宇佐見もジャコモッティに実際に会う前に、サルトルの論文を通して知っていたのである。

しかし、もっとも重要なことは、矢内原がジャコモッティのモデルとなったことである。このことによって矢内原はその生を生きるエネルギーをジャコモッティから得た。これは矢内原にとって決定的な意味を持つ。

長期間にわたってジャコモッティのモデルとなった人物は5人存在する。すなわち、母親のアネッタ、弟のディエゴ、妻のアネット、フランス女性のカロリーヌ、そして矢内原である。ここで注目すべきことは身内が3人、フランスの女性が1人で、矢内原は日本人であること、そして哲学者・詩人である点で、他の4人とは異なる。つまり、ジャコモッティと芸術談義が出来るのは矢内原のみである。この点は注目すべきところだ。

矢内原はジャコモッティの作品創造の現場にいたのだ。そこで矢内原はジャコモッティとの対談は勿論のこと、彼のつぶやきまで、ノートに書き留めた。矢内原の文章に感動するのは、創造のドラマに立ち合った証人の言葉のもつリアリティである。矢内原は単なるモデルではなくて、ジャコモッティの創造の言葉をわれわれに伝える希有なしごとをした人物なのだ。その功績は大きい。

ジャコモッティと宇佐見

宇佐見は矢内原の紹介で1960年にジャコモッティに会っている。そして、ジャコモッティのアトリエで、矢内原をモデルに制作中のジャコモッティを見ている。さらに、ジャコモッティの故郷スイスのスタンパの家に招かれるほどの親密な間柄となっている。

また、ジャコモッティの「終りなきパリ」(1960年、リトグラフ集150点収録、ed. 250)に宇佐見の肖像(no. 90)が収められている。このことは一部の関係者が知るのみで一般には余り知られていない。本カタログ図版(cat.no.10.b)をご参照いただきたい。

宇佐見はジャコモッティについて大小14編のエッセーを書いている。これはしかるべき機会をみて、一冊の本にまとめられることを私は願っている。エッセーのなかでも、特に「迷路の奥」(みすず書房刊、1975年)のジャコモッティに関する3編は著者のジャコモッティに対する敬愛のすがたがにじみ出ていて、私は感動した。宇佐見は見送ってくれたジャコモッティ

に別れを告げ、日本に帰るためにミラノ行きの列車に乗ったときの思いを次のように記している。

……………大切なのは土地でもなく風景でもなく、文化や文明の質でもない。大切なのは、創造に仕えること、仕事をとおして生成の鼓動をききとり、世界と一体になることである。大切なのは人間であり、愛であり、中心を目指す方向、極限を生きつらぬくことである。……………(“法王の貨幣——ジャコモッティの思い出に——”)

この言葉は私の肺腑をつらぬく。ただいまの私に勇気を与えてくれる。宇佐見がジャコモッティから得たものがいかに素晴らしいものであったかが分る。優れた芸術は小手先のものではなく、われわれに生きる力を与えてくれるものなのだ。

矢内原と宇佐見

この二人はともに1918年生れで、旧制第一高等学校以来の親友である。終生変らざる二人の友情は見事である。さらにその友情は、この二人がジャコモッティを共有することによってさらに強固なものとなった。ジャコモッティと二人の年齢差は17年である。兄貴格のジャコモッティに対する敬愛の心が根底にあって、二人のしごとが成立しているのだ。ジャコモッティを頂点とする二等辺三角形という形が見えてくる。

この展覧会は「ジャコモッティと矢内原伊作」展とタイトルされているように、矢内原を通してジャコモッティを見る展覧会である。ヨーロッパの大芸術家と日本の哲学者がモデルというかたちでかかわった稀有の東西文化交流を示す展覧会である。

そして、じいっとこの展覧会をみつめていると、その奥底から宇佐見の姿がみえてくるのだ。目立たぬようにひそやかに宇佐見がジャコモッティと矢内原の関係を支えているのがみえてくる。今回の展覧会を記念してメダルを作るとすれば次のようなデザインとなるであろう。

G-Y
U

この展覧会は矢内原と宇佐見の比類なき友情から生れたものである。

最後にこの展覧会開催について、ご協力いただいた矢内原鋤子夫人、

宇佐見英治、阿部良雄、エルンスト・バイエラー、小尾俊人、武田昭彦、富井玲子の皆様、そして名は記さないが、御支援いただいた多くの皆様に厚く御礼申上げる。ありがとうございました。

1994年9月1日

佐谷和彦